

OTOTEN2019 開催報告

展示会実行委員会

委員長代理 末永 信一 (ソニー株式会社)

さる6月29日、30日の2日間、有楽町の東京国際フォーラムにて、OTOTEN2019を開催致しました。あいにく2日とも雨になってしまい、来場者数は16,000人と昨年の来場者数17,000人に及ばなかったものの、東京国際フォーラムに会場を移してから3年目である今回は、内容もさらに充実し、例年以上のにぎわいに終わることができましたことを、主催者の一人としてお礼申し上げます。

毎年、事前検討を行っている展示会実行委員会の席上では、来場者数を伸ばすという目標と共に、若年層の来場を促進しなければいけないという声は必ず上がるのですが、今年は来場者アンケートに寄れば、若年層の来場がかなり増えており、出展された企業の方々からも喜びの声が聞こえてきております。

今年はいくつか新たな取り組みを行っておりますので、その中から私は2つの取り組みを中心に、会場の雰囲気などをご報告したいと思います。他の取り組みについては、別の担当の方から報告させていただきますので、そちらをご参照下さい。

■ プレス向け説明会(6/20)を開催

一つ目の取り組みは、OTOTEN2019開催日の一週間前に、プレス各社を東京国際フォーラムにお招きし、協会の取り組みや会場の見どころを紹介したこと。これにより、早いところではその日中にWebニュースにて説明会の報告内容が紹介されました。なかなか事前告知が行き届かないというのが従来の悩みでしたが、自分の会社で「今度の音展って、こんな展示があるんですね！」と声を掛けられると、情報の行き届き方として、これは成功だったのではないかと、いいタイミングで興味を持ってもらえたのではないかと考えています。



説明会の冒頭、小川理子会長が挨拶に立ち、「スマホでどんな事もできる時代ですが、その反面、バーチャル以外の体験、リアルなフィジカルなものが求められています。そうしたニーズ・シーズを受け止め、体験価値に結びつけていきたい」と述べられ、「従来はオーディオマニアが来場者の中心でしたが、若い方にもどんどん来ていただき、業界自体をどんどん活性化させたい」と力強く宣言されました。

続いて、照井事務局長から開催概要や音響芸術専門学校の学生インターンによるコンシェルジュの取組みが紹介され、また、出展各社の見どころも丁寧に紹介されました。

学生インターンの取組みについては、プレスの方々にも興味を持っていただいた様で、具体的にどんなことをするのかといった質問が飛んでいました。



■学生インターンによるコンシェルジュ

二つ目の取組みは、先ほどの説明会の中でも登場した音響芸術専門学校の学生によるコンシェルジュ。音響芸術専門学校は、音響エンジニアや演劇・ライブなどのステージスタッフを養成する学校ですが、インターンつまり授業の一環として、イベント運営に関わってもらおうという取組みです。協会側としてはオーディオを若い人たちに広めたい、関心を持って欲しい。学校側はイベントの裏側がどんな風になっているのか、どんな苦労があるのかを学生に体験させたいという、双方の願いが一致して実現したものとなります。

コンシェルジュは、オーディオスタートコーナーで商品の説明をするチーム、場内案内をするチーム、そしてセミナールームでスタッフをするチームの3つの役割にチーム分けされました。交代して役割から外れた時間には、食事や休憩を取るだけでなく、セミナーやメーカーブースを見学し、オーディオ商品の勉強をして、後日レポート提出することが義務付けられているので、なかなか大変なもの。



開催日朝には、スタッフTシャツを着た学生85人全員が揃って朝礼が行われ、小川会長からご挨拶をいただきました。会長もご覧のようなニコニコ顔で、しっかりと丁寧に「おもてなし」をして下さいね！とコメントされ、自ら笑顔の練習を指導されました。

開催日の一週間前に、協会の会議室等でコンシェルジュの説明会が行われました。右の写真は、オーディオスタートコーナーの学生たちが、機器の使い方を教わっているところ。



私もワイヤレスヘッドホンとウォークマンとの接続方法について説明を行いました。ノイズキャンセリングの効果やハイレゾの音の良さを初めて体験した学生が多く、これはヤバイ！と、今どきの若者言葉でスゴイという意味ですが、みんなで喜んでくれていました。

オーディオスタートコーナーは、B1フロアの受付近くに配置され、来場者の中でもオーディオを始めたい人への入り口となるように、しばらくオーディオをやってなかった人がもう一度やってみたいけど、最近の機器は難しそうだなあと思う人たちに、そんなに難しくありませんよ！というメッセージを伝える役割を担っていました。興味を持っていただいた方には、その機器のメーカーブースに誘導するという導線の役目も果たしていました。



最初はお客様に声を掛けるのを恥ずかしがっていた彼らも、だんだん面白くなってきた様子で、二日目には今日で終わっちゃうのかと言っていたのを耳にして、こうやって人間は成長するんだなあと実感したのであります。

来年はきっと、来場者として参加してくれることでしょう。



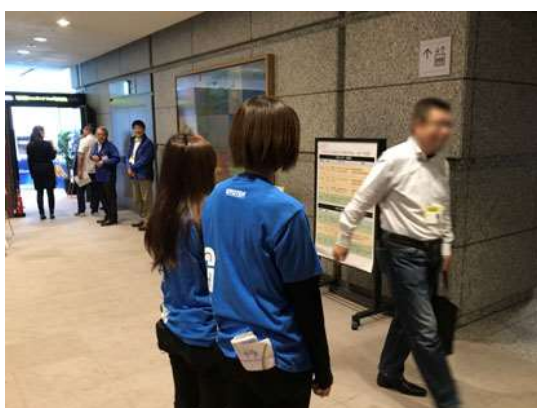
場内案内やセミナールームのスタッフを担当した学生たちも、自分たちの役割を良く考え、工夫して対応してくれていたのが、レポートから良く読み取れました。また、同じ内容の看板を2人で持つのは意味がないとか、来場者に配布するチラシの内容が教えられてなかったの、聞かれて困ったとか、運営側が想定しきれていなかった課題を見出してくれたのは大変ありがたいことでした。



入口近くで 絶賛呼び込み中!



こんな長いケーブル見たの 初めてです



音のサロンへようこそ



扉の開閉、照明の入切、整列誘導と大忙し



この建物は通路が複雑で、案内も大変



スタンプラリーは こちらです

■ OTOTEN2019 の出展ブースの話題



今回、会場で最も話題になっていたブースは、中国ブランド「ESD ACOUSTIC」ではないでしょうか。広いブースをフルに使って、巨大なホーンスピーカーのデモがされていました。

大きな音に驚かされるだけではないかと高を括っていたのですが、バランスの良い落ち着いた音が聴けたのには驚かされました。

パナソニック Technics ブースでは、待望のDJ ターンテーブル「SL-1200MK7」を中心にDJ ブースが設置され、DJ BUNTA 氏によるパフォーマンスが披露されていました。



オンキヨー&パイオニアブースは、『ガールズ & パンツァー 最終章』(C)GIRLS und PANZER Finale Projekt とのコラボによる、“ガルパン一色”のブースを展開。グッズの販売なども行なわれていました。もちろん学生たちの注目のブースとなっていたことは、間違いありません。

人気イベントである「音のサロン」も、常に満席状態。特に評論家の先生を迎えてのセミナーの時間は、立ち見が出るほど。



どこの企業も来場者を楽しませる工夫がされており、もっと時間があればじっくり見て回りたいものですが、富士フィルムやヤマハのブースは大変な人気で、いつ行っても長蛇の列ができており、見学できなかったのは残念でした。

ソニーブースでは、開催日の直前に発表したハイレゾ対応モニターヘッドホン「MDR-M1ST」が大人気で、試聴のために来場されるお客様が途切れない状況で、社員でありながらこれには大変驚いてしまいました。OTOTEN で初お披露目ただけに、興味のある方には、絶好のチャンスだったのですが、みなさんにご納得いただけて、良かったと思っています。他にもコンテンツ制作のセミナーやハイレゾマイクは来場者の関心が高かったようで、クリエイターともに「音楽感動」を創り、最高の音質でお届けするというコンセプトがうまく伝わったかと思います。



先に述べた様に、コンシェルジュの学生たちは交代して役目を外れると、ブースの見学にまわっていました。私はソニーブースに詰めていましたので、青いTシャツが尋ねてくるとその様子を見ていたのですが、社員もみんな丁寧に説明してくれたり、笑顔で相手をしてくれたりしている様子が伺えました。反応のいい若い人たちのおかげで、会場が明るくなった印象を持ちました。



■ 最後に

ネタバラシのようになってしまいますが、照井事務局長が3年ほど前から音響芸術専門学校の非常勤講師「電気音響」をされており、このたび学生によるコンシェルジュというアイデアを提案いただきました。実は私もこの春から副業で音響芸術専門学校の非常勤講師をしており、この学生たちに「電気電子・基礎講座」を教えております。つまりこの学生たちは 照井事務局長と私の教え子たちということになります。どんなインターン活動になるか、どんなことに興味を持ってくれるか、怖いおじさんに絡まれないかなど、子を見守る親の心境で観察しておりました。

初めて参加するイベントで、躊躇なくブースに入っていくのは勇気がいるだろうからと思い、「末永先生はソニーのブースに居るからね」と事前に伝えておいたら、案の定ほとんどの学生がいの一番にソニーを訪ねてきておりました。製品の説明を受けたり、試聴をしたりといった体験をしてみて、この会場全体で行われていることを少し肌で感じたのだと思います。そしてなによりも、ここで勇気を身に着けて、「ありがとうございました！」と言いながら、次のブースへと飛び出して行きました。

後日、学生が書いたレポートを見せていただきましたが、良い体験が出来たという話が多く、ソニー以外のブースでも学生に良くしていただいた話も見ることができましたので、関係者として、また講師として大変うれしく思っております。JAS ジャーナルへの報告ならびに写真掲載についても問題ないということで、本掲載に至っております。

若い人達に来場して欲しい、女性に来場して欲しいと 新規顧客を求める我々メーカー側の希望は常に展示会実行委員会でも話題になりますが、会場に来ていただくだけでなく、初めて来た人がブースに入ることに躊躇しないようにすることに、まだまだ課題があるように思いました。これをクリアし、リピーターになっていただくことこそ、OTOTEN のさらなる成功につながり、オーディオ業界の発展に導かれるのではないかと感じた次第です。

謝辞

学生によるコンシェルジュの実施にご理解をいただき、インターンとして学生を送り出していただいた音響芸術専門学校、並びにコンシェルジュを務めた学生みなさんに感謝いたします。

また、オーディオスタートコーナーに機器の貸出しをご協力いただきましたメーカー各社様に、御礼申し上げます。（順不同）

グーグル合同会社様、パナソニック株式会社様、株式会社インターアクション様、株式会社クリプトン様、株式会社ディスクユニオン様、株式会社オーディオテクニカ様、ラディウス株式会社様、エレコム株式会社様、ソニー株式会社様

執筆者プロフィール



カーオーディオコーナーで体験試聴する筆者

末永 信一

1960年、福岡県生まれ。

ソニー入社後、レーザーディスク、DVD、BDの商品設計ならびに高画質・高音質化技術の開発に従事。現在、ハイレゾオーディオ商品の普及啓発活動を中心に業界活動を担当。現職のかたわら、2019年4月より、音響芸術専門学校にて非常勤講師 担当